

令和7年度 西成区地域福祉フォーラム 要旨

【開催概要】

日時：令和7年11月29日 10:30～12:15

場所：西成区民センター

主催：西成区地域福祉推進会議（事務局：西成区役所、西成区社会福祉協議会）

司会

フォーラムのテーマ「いろんな人がいるからおもしろい～共に支え合う地域づくりをめざして～」を紹介。

三原 西成区副区長 あいさつ

近年、西成区では外国につながりのある住民の皆さまが大変増えており、地域社会がますます多様になっている。

本日は、昨年度に引き続き、多文化共生をテーマに、「外国人住民の困りごと」「外国人に伝わる優しい日本語」などの講演と、実際に日本で暮らす外国につながりのある方々とのパネルディスカッションにより、普段の生活で感じておられる出来事などについて、お話を伺いすることで、異なる文化や習慣などを、互いに理解し、日常でのつながりを深めていくきっかけづくりの機会になれば幸い。

今後とも共生社会の実現に向け、ご協力を賜りますようお願い申し上げる。

【講師 紹介】

梅元 理恵 様

公益財団法人大阪国際交流センター常務理事兼事務局長

大阪国際交流センターは天王寺区にあり、国際交流の拠点として、国際会議や研修、語学講座など様々なイベントに利用されている。

国際交流・国際協力・国際理解や多文化共生の推進を目的として、国際交流等の事業を実施するとともに、留学生を含む外国人住民を対象とした多言語による「外国人のための相談窓口」の運営や災害時の外国人支援などを実施し、大阪の多文化共生社会づくりに貢献されている。

【講演 外国人とともに暮らすとは～お互いのことをもっと知るために～ 要旨】

- ・日本人向けにまとめられたガイドブック「多文化交流お助けガイド 何でも聞いてや！」(発行：大阪市市民局)は、主に地域で外国人とコミュニケーションを進める方法についてまとめられている。
- ・外国人住民は生活習慣や文化の違いから、ごみ出しなど日常生活のルールやコミュニケーション面で不安を抱えることがある。
- ・このガイドブックには、日本人住民が知っていれば外国人の不安解消に役立つ手助け方法や、お互いの理解を深めるための情報が掲載されています。大阪に住む外国人住民の声や、会話時に役立つ知識、コミュニケーションツールも盛り込まれており、ホームページからダウンロードもできるため、QRコードで読み取り活用してもらえたと思う。
- ・西成区の状況について、外国人住民の国籍別状況を見ると、最も多いのは中国、次いでベトナム、韓国及び朝鮮、ネパール、ミャンマーとなっており、大阪市全体でも中国が1位、ベトナムが3位であり、西成区と同様、ネパールとミャンマーは全国的に増加傾向となっている。
- ・在留資格別では、西成区では留学が最多で、次いで特別永住者、技術・人文知識・国際業務、永住者となっており、西成区では留学が多いため、若い世代が多いことが特徴である。
- ・多くの外国人は町会活動自体を知らないことが多く、知っていてもなかなか勇気が出せない方も多いと聞くため、ガイドブックの活用や、気軽に一緒に行こうと誘う、といった働きかけが有効であると考えられる。
- ・日本では毎年大きな災害が頻発しており、能登半島の地震や水害、南海トラフ地震のリスクが話題となっているが、日本に住む外国人は、出身国が自然災害の少ないところもあるため、地震や台風の経験がなく、防災の説明が難しい場合がある。
- ・災害時には防災ガイドを活用しながら、避難訓練への参加や備えが重要である。
- ・外国人への防災アドバイスは、実体験が少ないと理解した上で行う必要がある。
- ・外国人は言葉や文化の違いから要配慮者となることもあるが、若くて元気な人も多く、日本語が分からない人に伝えることできるため、日本語と母国語の両方を話せる人が防災訓練で活躍することも期待されている。
- ・日本に住む外国人が病気やけが、事故の際に不安を感じることがあり、対応策として大阪府医療機関情報システムのように日本語や英語を含む複数言語対応の医療機関を検索できるものがある。
- ・日本での出産・子育・教育においては習慣の違いにより困難を感じる事例が多

い。

- ・多文化交流を通じて自分の視野が広がり、生活が楽しくなることもあり、日本の習慣だけでなく外国人が母国の文化を大切にする気持ちも理解し、異なる価値観や習慣を認め合い、押し付けることなく学び合うことが大切である。
- ・やさしい日本語は、外国人がみんな英語を話すわけではないことや、言語だけではコミュニケーションが十分でない中で有効といわれている。
- ・普段使う言葉を、外国人にも分かるように小学校3年生程度の簡単な日本語で話すことで、外国人だけでなく、日本国籍で外国ルーツを持つ人、高齢者、こども、障がい者にも役立つものである。
- ・やさしい日本語で交流することで外国人住民との相互理解が深まり、相手を気にかけ、思いやることができ、多文化共生への第一歩となると考えられる。
- ・多文化共生は、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」というふうに定義されており、お互い、地域で暮らす仲間として対等な関係を築き、違っているのが当たり前という考え方を知って欲しい。
- ・地域では、日本の習慣や文化を知らないことが原因でトラブルが発生することが多いと考えられる。
- ・個人間で解決が難しい場合もあるため、コミュニケーションをとり、地域全体で共に考え、交流会など気軽に話ができる場を設けることが重要である。
- ・地域の役員等と相談し、みんなで話し合いながら解決策を考えることが望ましい。
- ・災害時に互いに助け合えるよう、普段から顔の見える関係づくりから始めてもらいたい。

【パネルディスカッション 要旨】

パネリスト

ベトナム出身のゴックさん

- ・技能実習生、そして留学生として過ごした経験がある。
- ・2023年1月の石川県地震では、現地のベトナム人への支援ボランティア活動も行った。
- ・今後も地域・学校・多文化コミュニティと協力し、より良いサポートの提供を目指す。

中国出身の金子さん

- ・毎週一度、日本語教室でボランティアとして日本語指導を行っている。
- ・過去には大学で中国語教師、出版社勤務（編集、翻訳、通訳）などを経験。
- ・日本語学習歴は25年、日本での生活は6年目、大阪は約2年。

パキスタン出身のガフールさん

- ・現在は、日本に住む外国人やその家族、こどもたちの教育支援を行っている。
- ・日本の教師や保護者の外国人についての理解を深めるため、学校関係者や地域のリーダーの架け橋となることを目指し活動している。

《母国と日本の習慣の違いについて》

ガフール)

- ・外国人に対してガイドブックやプリントなどの資料を配布されるが、外国人は母国でプリントを配る習慣がないため、プリントをもらっても見ないため、紙の配布ではなく、グループごとに避難場所や地域の施設へ直接案内する方法が効果的である。
- ・日本人は外国人への接触に関して消極的で、外国人は積極的に行動するため、こうした日本人の性格を外国人に伝えることが理解につながると考えられる。
- ・自転車利用に関して、外国人が道の真ん中を走ったり、商店街に自転車を止めることで、妊娠中の方や車椅子利用者などに迷惑がかかる現状があり、学校や地域のボランティア、区役所がマナー指導やパトロール、注意喚起を行うことが望ましい。
- ・外国人の生活習慣（声が大きい、夜騒ぐ等）はすぐには変わらないが、地域として理解を深め、ボランティアや学校、区役所が機会を作っていくことが、互いに歩み寄るきっかけになると考えられる。
- ・文化的背景や習慣は短期間で理解・変化するものではなく、継続的な学びと交

流が必要である。

ゴック)

- ・母国であるベトナムと日本の仕事の進め方の違いについて、日本では仕事を細かく丁寧に確認し、協力しながら地道に進めるが、ベトナムでは、仕事のスピードが速く、早く対応できる俊敏さが魅力だと考えられる。
- ・双方の良さを見て学びながら成長したいと考えている。

金子)

- ・中国では親しくなると「ありがとう」と言わない習慣があり、もし身近な人が改まって感謝の言葉を使うと距離を感じてしまうことがある。
- ・一方、日本人は感謝の言葉が少ないと徐々に距離を置く傾向がある。
- ・これは中国の日常的な習慣と日本の習慣との大きな違いのひとつである。

《地域との関わりについて》

ガフルル)

- ・友達がたくさんおり、食事会や花火などに誘われることがあり、ありがたいと思っている。

金子)

- ・毎週、家の近くの日本語学校でボランティア講師をしている。
- ・活動のきっかけは、学校のチラシで日本語教室の案内を見て申し込んだこと。

ゴック)

- ・昨年12月に赤ちゃんを出産し、外出の機会が少なかったものの、仕事復帰をきっかけに地域活動へ参加し始めた。
- ・赤ちゃんと毎日散歩をしながら、近所の日本人住民との交流を積極的に行っている。
- ・引越し直後は近隣へ挨拶にも行き、日本人のおじいさんからプレゼントをいたぐなど、親切な交流があった。

《防災、災害が起きたときの備えや、自身ができることについて》

金子)

- ・初めて上海に引っ越した際、台風の経験があり、事前に食料を準備しておらず空腹のまま台風が過ぎるのを待ったことがある。
- ・去年日本語学校で行われた防災訓練を通じ、留学生の行動が遅いことを実感し、

中国では災害の経験や訓練をしたことがない人が多い。

- ・日本では毎年小学校から防災訓練が行われており、外国人の子どもは防災訓練を経験することができるが、保護者については、周囲からの支援をお願いしたい。
- ・災害時には、自身の語学力を活かし、声かけや避難所での通訳などの支援活動を行いたい。

ゴック)

- ・ベトナムでは最近、台風や洪水が連続して発生し、全国的に厳しい状況が続いている。
- ・今年は特に洪水の被害が広がっており、生活にも大きな影響が出ています。
- ・日本では災害が多いため、日本在住の間に防災訓練への参加や災害時の援助方法を学びたいと考えている。
- ・今後の災害への意識を高め、対策を整え、日本で集めた物資などを、困難に直面しているベトナムの地域に送りたい。
- ・実際に家族で防災訓練に参加し、日本の知識をベトナムで活かしたい。

ガフル)

- ・パキスタンでは防災訓練や避難場所はないが、互いに助け合い、家に招待し合うなどしている。
- ・日本で災害が起きた場合には、通訳やお世話を積極的に行うことで忙しくなると想定している。
- ・みんなに食べやすいカレーライスを作つて提供し、元気をもらいたいと考えている。

《日本に暮らす外国人として今日本人のみなさんに伝えたいことについて》

ゴック)

- ・日本で生活するベトナム人として、日本人は同じ地域で暮らす仲間として支え合える存在であり、文化や言語の違いがあっても、助け合うことで安心して暖かい地域社会を築けると信じている。

ガフル)

- ・外国人は、日本人にジョークを言っても通じにくいと感じているため、「今からジョークを言います」と事前に言うことがある。
- ・話が終わった後も日本人の表情が変わらないことから反応が薄いと感じている。
- ・外国人のジョークを楽しんでほしい。

金子)

- ・日本人の同僚から頻繁に「ありがとう」と言われ、文化の違いについて実感している。
- ・日本人は空気を読む習慣があり、外国人に不快感を持つても口に出さないが、外国人はその理由に気づくことができない。
- ・日本の常識は外国人の常識と異なるため、思ったことは外国人に対してはつきり伝えるべきである。
- ・日本の「ありがとう」を言う習慣は素晴らしいと感じている。

《総括》

梅元)

- ・文化や考え方の違いは、話し合うことで理解を深められるが、一方的に相手を責めたり、自分だけが悩む形にならないようにすることが重要である。
- ・お互いが気づいていない新たな学びを得る関係性を築き、どちらが正しいという対立ではなく、お互いを理解しあいながら、笑顔と助け合いを大切にする関係性を築いてもらいたい。
- ・まちでの声掛けから地域での新しいつながりが生まれ、活力のあるまちへ西成区から始めてもらいたい。
- ・パネリストさんとの出会いを大切にし、みんなの交流が進むことを期待している。